

「チャーリー」型住宅の変容について —F.L.ライトの住宅作品における多様性生成システムの研究—

水上 優
人間環境部門

Modifications of “Charnley” Type Houses A Study on the Diversity Generation System of Frank Lloyd Wright’s Houses

Yutaka MIZUKAMI

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: This paper makes an analysis of the modifications of the houses of “Charnley” Type prescribed by this study as the hall connects and separates living room and dining room. The results are as follows: 1. The modifications of “Charnley” Type houses come into existence from relationships between living room, dining room, and hall. 2. The key factors to differentiate living room and dining room are pointed out as follows: planar shape, dimensions, axial direction of the rooms, shape of the ceiling and difference in height, floor material and difference in height, windows, fireplace and sideboard. 3. The hall serves effectively to be in-between space of living room, dining room, entrance and stairs.

In conclusion, it was suspected for the modifications of “Charnley” Type houses that there may have been relation to, and influence on another Types of prairie houses.

Keywords : Frank Lloyd Wright, prairie house, diversity, living room, dining room, system

1. はじめに

本稿は、建築家フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright, 1867–1959) の思索と制作の関わり合いを、それらの変容の事態に着目しつつ明らかにする研究の一部をなすものである¹⁾。作品の変容の事態は、独自のダイアグラムを用いて分析される。すなわち、住宅をその構成要素 (部屋) に解体し、平面、断面に即して配置するダイアグラム A²⁾、及び構成要素から形態、寸法などのデザインの要素を取り除き、要素間のかかわり合いを示すダイアグラム B³⁾ である⁴⁾。先稿⁵⁾において、初期住宅作品の主室 (居間及び食堂) を構成する要素の繋がりに次のような同一性が指摘されている。すなわち繋がり①:「EH (入口) – Lib (書斎) あるいは Re (応接室) – L (居間) – D (食堂) – Pa (配膳室) – K (台所) – SH (階段室) – E (入口)」⁶⁾、繋がり

②:「L–EH–D」及び繋がり③:「EH–LD (食堂を含む居間)」。これに構成要素としての主室 (L、D) の「平面的連続形式」すなわち④互いの矩形平面の辺で接するもの、⑤L、D、Lib (あるいはRe) の3室が一直線状に連続するもの、⑥平面のコーナー (隅角) 部分で対角線方向に連続するもの、以上を反映させることにより、かれの住宅作品の特徴として、いくつかの「型」が仮設される (表1)。これらの型の概念の導入によって、同一型に属する個別住宅作品間の差異と同一性が、型の展開として記述分析される。また異なる型に中間的に属する作品への注目によって、型同士のかかわり合いが考察される。その全体像を或るシステムとして浮かび上がらせることが、本研究の目的である。

本稿では「チャーリー」型に分類される住宅を考察する。初出となるチャーリー邸 (1891) は、独立以前のラ

[表 1] プレイリー・ハウスの型 (室名の略記は注 6 参照)

主階平面／断面図	繋がり ①			繋がり ②				
	自邸型	ヒコックス型	ウィリッツ型	チャーリー型	パートン型	ハーディ型	ロビー型	デイビッドソン型
ダイアグラム A								
ダイアグラム B								

イトがアドラー&サリヴァン事務所所属時代に担当したキャリア最初期の作品であり、続くマッカーサー、ハーラン、クラークの各邸 (1892) は、サリヴァンに隠れて行った設計⁷⁾である。本稿では、1916年までに実現した作品および計画案における「チャーリー」型住宅39作品をとりあげる。1900年以前の住宅の型は、オークパークの自邸 (1889) から始まる「自邸」型と、この「チャーリー」型しか見られない。後に出現する各型との連関が問われるであろう。

2. 「チャーリー」型平面の住宅の構成

「チャーリー」型は、L と D が EH を介して繋がる「繋がり ②」において、3者が①「互いの矩形平面の辺で接する」ものであり、ダイアグラム B に [] を用いて [L-EH-D] と示される。本稿では、L と D との繋がり方の同一性と差異を論じるため両者を繋ぐ媒介空間を EH に限定しないこととする。すなわち L と D とが直接つながらない (繋がり ①ではない) もののうち、別の型 (「パートン」型、「ハーディ」型、「ロビー」型、「デイビッドソン」型) に属さないものを全て考察の対象とする。とりあげる住宅のダイアグラムを [表 2~12] に示す。変容の意味を考察するため、先ず各住宅の構成を、L、D、及びその媒介空間を中心に記

述分析する。分析にあたり、L と媒介空間と D の 3 者が一直線状に繋がるものを [L-媒介空間-D]、L 字形に繋がるものを [L\媒介空間/D] と表記する。

①チャーリー邸 (1891) : 地下 1 階地上 3 階建て。1 階に [L-ESH-D]。L、D とともに矩形平面であるが長軸方向は異なり、暖炉⁸⁾ がそれを強調。L 周壁に書棚、D に食器棚。3 層吹抜けの SH を挟んで 2 階に 2B、3 階に B と 2 SvB。1 階 ESH に 2 Alc。使用人専用階段あり。

②マッカーサー邸 (1892) : H は Lib、D、Re、E、主階段と繋がり、D と Lib (図面表記 Lib であるが実質的に L⁹⁾) とは [Lib\H/D]。H に暖炉。Lib、D、Re の隅角部に八角形ベイウィンドウが迫り出す。L、Re は住宅正面の Po に繋がる。2 階に 5 Ch。屋根裏階に Bil と 2 SvB。主階段と使用人階段が途中で接続。

③ハーラン邸 (1892) : H は E、L、D、Lib、主階段と繋がり [L-H-D]。暖炉は E、D、Lib にあり L にはなし。L は矩形平面で面積最大。外部に同幅で Te。D 奥に Bre。E と Lib の暖炉は背中合わせ。Lib に八角形ベイウィンドウ。2 階平面の詳細不明。使用人専用階段あり。

④クラーク邸 (1892) : 正面 Ve 側が客用、側面 Po 側が家族用、K 側裏口が使用人用の入口¹⁰⁾。正面階段-Te-V-

[表 2] 「チャーリー」型住宅のダイアグラムと平面図 (1)

	ダイアグラム A	ダイアグラム B	平面図	ダイアグラム A	ダイアグラム B	平面図
①チャーリー						
②マッカーサー						

E-H が1階平面中央で軸を形成し、各室間のアーチと H の暖炉が軸を強調。軸に直行して [Dra-E-Re]。Dra に飾り戸棚、Re に暖炉、両者八角形ベイウィンドウを持つ。H には暖炉と主階段が灑され [D\H/Sit]。Sit¹¹⁾ は Re に繋がるとともに半八角形平面の Po に開く。2階は OCh 及び 3Ch、Nu。屋根裏階は Bal。使用人専用階段あり。

⑤ウィリアムズ邸 (1895) : E は Re、D、L、主階段と繋がり [L\E/D]。L は矩形平面で暖炉を持ち、奥で八角形平面の Lib (暖炉あり) に接続。D は八角形ベイウィンドウ付きで暖炉あり。2階に 4B。使用人専用階段あり。

⑥ムーア邸 (1895) : 6 Ch と複数 Sv を持つ大規模住宅。H は D、階段室、Re、Lib に繋がり、L は Lib と Re の間にあるヴォールト天井廊下の先。H、D、Lib、L に暖炉。L は最大面積矩形平面で八角形ベイウィンドウを持ち、Re に接続。D 奥に Con。2階に 6Ch。使用人専用階段あり。

⑦ヘラー邸 (1896) : 3階建て住宅。H は E、L¹²⁾、D、Re、主階段に繋がり [D-H-L]。L、D は共にアルコールのある十字形平面で暖炉を持つが、長軸方向が異なり、L は面積が大きく暖炉がアルコールにある。2階に 4B、SvB。3階に Pla、2Sv。使用人専用階段あり。

⑧ウォーラー邸案 (1898) : 平面中央の H が E、L、RE、主階段、D、Re に繋がり [D-H-L]。L と D の平面は同形同大の矩形平面で L には暖炉、D には食器棚が付く。2階は暖炉付き MB、B、2層吹き抜けの Nu、Sew、及び SvB。使用人専用階段あり。

⑨ハッサー邸 (1899) : 3階建て大規模住宅。地上階には主階段を持つ大空間の H 以外サービス緒室にあてられ、主階は2階。主階段を上った2階 H において [D-H-L]。D と L の暖炉が [D-H-L] を強調。L は矩形平面で前後にアルコールを持ち、奥の暖炉背後で八角形平面 Po に開く。D は側面に暖炉があり、食器棚を背に湖のある東側に八角形ベイウィンドウが迫り出す。使用人専用階段あり。

⑩ヒルズ邸 (1900) : H は主階段を含み、V、L、D に繋がり [D-H-L]。H は L、D 間のみ天井が低くトリムが廻る。L は側面に暖炉、奥に Lib、対面 Ve に開く。D に食器棚。2階に 5B。屋根裏階に 2B。使用人専用階段あり。

⑪ジョーンズ邸 (1900) : ブリッジ下端部 E から数段上った H が L、D、Bil に繋がり [D\H/L] かつ [Bil-H-L]。L と D の暖炉は背中合わせ。Bil にも暖炉。L は3方に屋根付き Po さらにその先に半円形 Po を介して湖に開く。L 内の階段から半階上った、E、H 上の Ba は L と Bil を見下ろす。2階に 5B。使用人専用階段あり。

⑫トマス邸 (1901) : 地上階にはサービス緒室が灑され主階は2階。住宅平面全体は L と D を2翼とする L 字形。H は V、L、D、及び階段室への通路に繋がり [L\

[表3] 「チャーナリー」型住宅のダイアグラムと平面図 (2)

	ダイアグラムA	ダイアグラムB	平面図
⑤ウィリアムズ			
⑥ムーア			
⑦ヘラー			
⑧ウォーラー案			
⑨ハッサー			
⑩ヒルズ			
⑪ジョーンズ			
⑫トマス			
⑬フリック			

【表6】「チャーナリー」型住宅のダイアグラムと平面図（5）

	ダイアグラムA	ダイアグラムB	平面図	ダイアグラムA	ダイアグラムB	平面図
①⑨ W.フリーマン						
②⑩ M. アダムズ						
③⑪ ギルピン案						

【L-H-Bre】。E と H はアートガラスの天井照明によって連続性が強調される。L は変形凸形平面で天井トリムが廻る。L 暖炉に付随するベンチ側面の衝立は視覚的に H と連続。D は矩形平面で天井トリムが廻り、Bre と外部 Ve に接続。Bre は菱形パイウィンドウを持ち天井に井桁状トリム。主階段は視覚的に H に開放的。2階は暖炉と Ba のある MB、及び3B。3階は暖炉と Ba 付き Pla、及び Sv。

①⑨W.フリーマン邸（1903）：H は L、サービスへの Co、D、主階段、V、Lib に繋がり【L-H/D】。H を挟んで V と L が同一天井で、D と Lib が間仕切りアーチで、それぞれ正対。L も D も矩形平面で、L のみ暖炉と八角形パイウィンドウを持つ。2階は MB と 3B。屋根裏階に 2 SvB。使用人専用階段あり。

②⑩M.アダムズ邸¹⁴⁾（1905）：細長い通路状の H を挟み Re と主階段が正対し、左右に【L-H-D】。H は、Re 間には段差、L、D 間には垂壁。L は凸形平面で暖炉を背に外部の屋根付き Po へ開く。D は矩形平面。2階は 3B と SvB。

③⑪ギルピン邸案（1905）：EH は Stu、主階段、D に繋

がり【Stu\EH/D】。Stu へは広い間口で天井端部を差し込んで繋がるのに対し、D へは主階段昇降口を経由して折れ曲がり狭い間口で繋がる。Stu の平天井の高さは EH の約 1.5 倍あり、暖炉は天井に達し、Dar を持つ。D の天井は梁露出。2階は D 上部に Stu とほぼ同じ天井高の Mu。半階上って MB、B。主階段の踊り場から Sv に接続。

②⑫フラー邸案（1906）：軸性のある形式的構成。矩形平面の H¹⁵⁾ は L、主階段に至るヴォールト天井の Co、D に繋がり【L-H-D】。L-H-D 間に垂壁。矩形平面の L は暖炉と窓を中心軸に対象形。D は正方形平面で、その食器棚は Co 挟んで L 暖炉と背中合わせ。2階に 3B。

③⑬ミラード第1邸（1906）：E 半階上の H が【L-H-D】を構成、室間は垂壁で仕切られる。L は凸形平面で正方形部分の天井中央が迫り上がる。ヌックのある L 暖炉脇から階段室に繋がる。D は正方形平面。2階は MB、2B、Sew。

④⑭ブラウン夫人邸第1案¹⁶⁾（1906）：EH は V、L、階段室、D に繋がり【L-EH-D】。EH の天井は L、D より低い。EH と L 及び D との間仕切りは両開き引き込み扉、

【表7】「チャーナリー」型住宅のダイアグラムと平面図（6）

	ダイアグラムA	ダイアグラムB	平面図
⑤⑮ クーナーリー			

表10 「チャーナリー」型住宅のダイアグラムと平面図 (9)

	ダイアグラムA	ダイアグラムB	平面図
②②シュローダー案			
③③ブース第1案			

がL、Dに繋がり [L-Re-D]。Re と L 及び D の間は低い天井のアルコーブによって仕切られる。Re には暖炉と主階段がある。矩形平面のL は天井の梁で南北に二分。南西側は小さな窓列で入り口と外部 Po に開かれ、炉辺のある暖炉が配された北東側は大きな窓列で北側に視覚的に開かれる。D は南北に細長い矩形平面で食器棚が付く。2階はMB、3B、SvB。使用人専用階段あり。

③①ボールドウィン邸 (1909) : 第1案同様 Re が L、D を媒介するが、配置が入れ替わり [D-Re-L]。Re は別れた階段室、E と繋がる。L にはベンチ付暖炉があり南西側は半円形平面。暖炉脇から Po へ接続。D は矩形平面で食器棚が付く。階段室奥に Sv。2階は暖炉付き MB と 3B。

③①ベイカー邸⁽²⁰⁾ (1909) : Re は正面に主階段を配し、左右でL、Dに繋がる [L-Re-D]。L は凸形平面。2層吹き抜け船底天井で、暖炉前のみ低い平天井。Re と反対側で Po に開く。D は矩形平面で食器棚があり、Re と反対側で Po に開く。平屋のL-Re-D に対して背後の寝室及びサービス諸室は半階下がって2階建て。下階に Sv、La、He、上階にMB、2Bv、吹き抜けLに面する屋内Ba。

③②シュローダー邸案 (1911) : 3階建て大規模住宅。1階では道路を挟んで分かれる主屋棟とサービス棟が2階で繋がる。主屋棟1階は暖炉付きの広いEとSH、暖炉付きClu。2階SHがL、Dと繋がり [L-SH-D]。Dとは開放的に連続する一方、Lとは飛長押で区分。Dは矩形平面で簡素な暖炉付き。湖を望むTeに繋がる。Lは凸形平面でレリーフをもつ豪華な暖炉を背にPoに開く。Dの暖炉、階段室、Lの暖炉が2階平面の中心軸上に配される。SHからL、Dと反対側に2GB。3階に暖炉付き2B。

③③ブース邸第1案 (1911) : 曲がりくねった溪谷を跨ぐように建つ大規模住宅。正方形平面で2層吹き抜けのL棟からD翼、2つのB翼、外部Perが伸びる。L北面は吹き抜け天井に達する巨大な暖炉、東面は窓から溪谷を望み、南面と西面はそれぞれTeに開く。L天井壁沿いにトップライト。2階階段室前SHはL吹き抜け上部(Vo)、ConとDに面することで[(LVo)-SH-D]となる。D奥にDPo。

③④カッテン邸案 (1911) : 広大な敷地に建つ大規模住宅。入口となるHは主階段をL字形に囲み、Of、L、Lo、Dに繋がり [L-H-D]。Lは凸形平面で暖炉を持ち、庭側は

表11 「チャーナリー」型住宅のダイアグラムと平面図 (10)

	ダイアグラムA	ダイアグラムB	平面図	ダイアグラムA	ダイアグラムB	平面図
③③カッテン案				③⑤リトル第2案		

〔表 12〕「チャーナリー」型住宅のダイアグラムと平面図 (11)

	ダイアグラムA	ダイアグラムB	平面図	ダイアグラムA	ダイアグラムB	平面図
③⑥ H.アダムズ						
③⑦ メンデルソン案						

フレンチウィンドウと石現し柱の繰り返し、南側は腰壁のある窓列。Dは矩形平面で奥にBre。Breから外部に伸びるPerの先に茶室。2階はMB、4GB。

③⑤リトル第2邸 (1912) : なだらかに起伏する湖畔の広大な敷地に建つ大規模な夏の別荘。壮大な外部階段によって到達する上階Teからのアプローチは、PavとLの間のEからと、Lib前のH²¹⁾からとがある。広々としたL²²⁾は暖炉、南北の見晴らし窓を有し、天井は中央が迫り上がり天井照明がデザインされる。Lの暖炉の裏側のHはLib、GBに面し、下階Dへの直線階段に繋がる。Hの奥に暖炉のあるMBとB。下階はDとGB、及びサービス緒室。D南側はフレンチウィンドウによって外部Teに接続。

③⑥H.アダムズ邸²³⁾ (1912) : コンパクトなEHは正面SHと左右L、Dに繋がり [L-EH-D]。天井トリムは3室外周を取り巻いて連続性を強調しつつ、3室間には飛び長押が渡される。Lには暖炉が、Dには食器棚が配される。LはVeに開かれる。SH奥にBrePo。2階はMBと3B、及びSew。

③⑦メンデルソン邸案 (1913) : 平面の全体構成は、LとMuのゾーンとDゾーンがL字形をなし、両ゾーンの結節点にE。EはRe、D、Mu、及び主階段とLへのCoに繋がる。LはMuの先に独立した棟として配され [L-Co (Mu) \ E/D] となる。矩形平面のLは中央平天井が周囲から迫り上がる天井でトリムがそれを強調。Lの暖炉は背面のMuの暖炉とシャフトを共有。MuとCoはそれぞれTeに開く。Dも矩形平面で暖炉を持つが、天井は矩形トリムが3つ並行に配される。Reも暖炉を持ちDの天井トリムのデザインと相同。2階はDゾーン上のみあり、5B、Sewがスリーピング・ゾーンを形成する。

③⑧ブース邸 (1915) : 平面の全体構成は、Lゾーンとスリーピング・ゾーンがL字形をなし、HがLゾーンの同一線上にDゾーンを繋ぎ、全体としてT字形をなす。Hには主階段も配される。[D-H-L]の繋がりにおいて、D

とHはタイル張床仕上げを同じくし、主階段はL側に開放的。Lゾーンは手前、中、奥がS字形に連なり、中に暖炉が配され、奥はLPo。Dは正方形平面。Hとスリーピング・ゾーン (MB、2B) 間は扉で区分。Lゾーンのみ3階建てで他は平屋。2階に3B、3階にSPoと屋上Te²⁴⁾。

③⑨アレン邸 (1916) : 平面の全体構成は、LゾーンとDゾーンがL字形をなし外部TeとGを囲む。両ゾーンの結節点にE。Eには暖炉、主階段が配され、[D\E/L]となる。Eの床タイルはLのTe側とDのTe側に連続し、両室との間仕切りなし。Lは端部に凸形アルコーヴを持つ矩形平面で、暖炉が配され、中央平天井が周囲から迫り上がり、天井照明がデザインされる。外部Te側はフレンチウィンドウの列でGへ開く。Dにも暖炉が配されるが、天井には2本の梁が架け渡され、間に天井照明がデザインされる。2階はDゾーン上にスリーピング・ゾーン (Stu、Bou、2B、GB、SPo) を形成。Lゾーンは平屋建て。

3. 「チャーナリー」型平面の住宅の変容

「チャーナリー」型平面として [L-EH-D] の構成を同じくしながらも、それぞれの住宅は異なるデザインを示している。「チャーナリー」型の住宅のデザイン的差異を見ていこう。そもそも繋がり②の構成は、L-D間を直接行き来できない点において、行き来可能な繋がり①や同一空間となっている繋がり③に対して、LとDとを区別する構成である。この型に大規模住宅 (⑥、⑨、⑭、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕等) が多いことは、1つの特徴であると言えよう。同じ繋がり②であっても、(L-EH-D)として一体的な空間を志向する「バートン」型や、<L-EH-D>として連続的な空間を志向する「デイビッドソン」型に対して、これらではないものとして、「チャーナリー」型では、LとDとのいわば積極的な区別が志向されている可能性がある。LとDとのデザインの区別のあり方の観点から、その変容を分析しよう。

3-1) 居間と食堂のデザイン的区別の多様性

前章の分析を概観すれば、LとDのデザイン的区別のあり方は多様である。まず①チャーナリー邸(1891)では、住宅全体が矩形であるなかで、Dにはベイウィンドウがつけられている。すなわち(1)平面形状による差異づけが行われている。八角形ベイウィンドウによる両者の差異付けは⑤ウィリアムズ邸(1895)、⑥ムーア邸(1895)、⑨ハッサー邸(1899)、⑩W.フリーマン邸(1903)に見られ、このうち⑥と⑩はLにベイウィンドウがある。八角形ベイウィンドウによる差異付けは、一方で、バグリー邸(1894:「自邸」型)やウォリス・コテージ(1900:「ウィリッツ」型)等、ライトの他の型の住宅にもしばしば見られ、あるいは当時の雑誌で紹介される他の設計者の住宅にも散見されるデザインである。矩形ベイウィンドウの場合は凸形平面となるが、これによってLとDを差異付けているものは⑫トマス邸(1901)、⑬ウォーラー別荘第1案(1902)、⑭W.マーティン邸(1903)、⑮M.アダムズ邸(1905)、⑯ミラード第1邸(1906)、⑰エヴァンズ邸(1908)、⑱ペイカー邸(1909)、⑲シュローダー邸案(1911)、⑳カッテン邸案(1911)、㉑アレン邸(1916)がある。ゲイル婦人邸(1909:「自邸」型)等、多くはないが他の型でも見られる。⑭ダナ邸(1902)ではLが凸形平面でDに半円形ベイウィンドウが付く。半円形ベイウィンドウのDはブラッサム邸(1892:「自邸」型)やウィンズロー邸(1894:「自邸」型)等初期のごく一部の作品にのみ見られるが、半円形平面のLは、プレイリー・ハウス期には、㉒ボールドウィン邸(1909)のみである²⁵⁾。

①チャーナリー邸ではまた、2室の広さ(面積)が異なる。LがDより広いという(2)面積による差異づけは一般的なことであり、ライトの作品でもほとんどそうになっている。その上で、⑧ウォーラー邸案(1907)と⑲マコーミック邸案(1907)において、LとDが同形同大であることの特異性が却って際立っているであろう²⁶⁾。

もう1点、①では(3)平面の軸の方向による差異づけが指摘される。⑦ヘラー邸(1896)⑨ハッサー邸、⑫トマス邸、⑭ダナ邸、⑮W.マーティン邸、⑯W.フリーマン邸、⑲ミラード第1邸、⑳クーンリー邸(1907)、㉑ボールドウィン邸第1案(1909)㉒ペイカー邸、㉓シュローダー邸案、㉔カッテン邸案、㉕メンデルソン邸案(1913)、㉖アレン

邸等があげられる。①ではデザインエレメントとしての暖炉が両室とも平面の軸上にあってその軸を強調しているが、暖炉と軸の関わり合いのあり方はそれだけではない。⑦ヘラー邸では両室とも2つのアルコーヴを持つ十字形平面であるが、Lでは天井の低いアルコーヴに、Dでは天井の高い主空間に暖炉があり、両室の雰囲気の違いをもたせている。⑨ハッサー邸では、Lの暖炉は軸上にあり、軸に重なってそれを強調する一方、Dの暖炉はLの軸上にあることで両室を結びつけつつ、八角形ベイウィンドウでDの軸をそれから90°逸らせ、暖炉を傍らに室を風景へと向けさせている。エレメントに窓を加えれば、さらに様々なヴァリエーションがある。㉕クーンリー邸では両室とも矩形平面の長辺に窓列があり、暖炉を背にして視野が開かれるが、㉑ボールドウィン邸第1案ではLの暖炉は短軸方向の傍らで燃えている。⑥ムーア邸では両室とも平面軸と暖炉の方向が一致するが、窓の開かれる方向が異なることで両室の差異が生み出されている。

両室の差異を生み出す契機にはまた、(4)天井による差異づけがある。⑫トマス邸におけるDの船底天井は、ライトの住宅の主室における船底天井の初出である(図1)。縞状に並ぶ天井トリムが平天井との差異を強調する。以後、ハートリー邸(1902:「自邸」型)のDやチェイニー邸(1903:「ヒコックス」型)の(D-L-Lib)に採用され、ライト空間の質に関わる重要なヴォキャブラリーとなる。この天井実現のためには、基本的に上部に部屋がないこと、すなわち屋根裏部屋の排除、あるいは主階の2階への持ち上げ、また室の外部への伸長等が必要であるが、それはそのままプレイリー・ハウスの特徴であり、その全てが⑫トマス邸に備わっているのである。⑰リトル第1邸(1903)のDでは船底天井頂部にアートガラスの天井照明が組み込まれる(図2)。⑲ミラード第1邸のDはいわばドーム状に中央の天井が周囲から持ち上げられる。㉕クーンリー邸はLもDも船底天井であるが、トリムと天井照明のデザインの差異が両室の差異表現の一翼を担う(図3)。㉗エヴァンズ邸、㉘リトル第2邸(1912)、㉙メンデルソン邸案、㉚アレン邸は、ドーム状に持ち上げられた天井頂部に天井照明がデザインされる(図4)。⑭ダナ邸のDは吹き抜け空間上部に半円ヴォールト天井が載る(図5)。Lが吹き抜ける⑲ペイカー邸は、「デイビッドソン」型の亜種である。プレ



図1) トマス邸



図2) リトル第1邸



図3) クーンリー邸



図4) エヴァンズ邸



図5) ダナ邸

イリー・ハウスにおける L と D の吹き抜け空間の実現は、⑭ダナ邸と「デイビッドソン」型住宅²⁷⁾の他にはハーディ邸 (1905:「ハーディ」型) しかない²⁸⁾。③ブース邸第 1 案 (1911) では、L 吹き抜け上部と 2 階の D が H で繋がるというダイナミックな構成が提案されている。

(5)床による差異づけもある。②マッカーサー邸 (1892)、④クラーク邸 (1892)、⑥ムーア邸、③ブース邸 (1915)、③アレン邸の平面図には、主室の床仕上げが表記される。②では L、H、D の床は同じオーク材、④では D、H、Dra がオーク材、Sit、Re はパイン材と変えられている。⑥では床材と仕上げ塗装とが指定されており、L と D は同じ仕様 (パイン材にオーク塗装) であるが、その間にある H、Lib と Re は異なる仕様 (前 2 者はオーク材にオーク塗装、後者はパイン材にマホガニー塗装) で区別されている。③では、H、D のみタイル仕上げが指示されている。③では、L と D の床材の指示はないが、その間にある E、L と D の Te 側ゾーン、及び Te の仕上げがタイル表記されている。L と D とが別の階にあるものとして、③ブース邸第 1 案と⑤リトル第 2 邸があるが、「チャーリー」型において、両室間の床高に階高以下の高低差がある計画はない。

(6)開口部による差異づけとして、先ず上述の契機 (1) のベイウィンドウや (4) の吹き抜けには、それぞれ呼応する窓が設けられる。③ハーラン邸 (1892) では L の幅いっぱい フレンチウィンドウの列が灑され、D の窓列、さらには Lib の 8 角形ベイウィンドウと対比されている。L からフレンチウィンドウによって Ve や Te に通じるものは、他に④クラーク邸、⑤ウィリアムズ邸、⑪ジョーンズ邸 (1900)、⑫トマス邸、⑮モシャー邸案 (1902)、⑯ウォーラー別荘第 1 案、⑲ミラード第 1 邸、⑳メイ邸 (1908)、㉑ボールドウィン邸第 1 案、③ブース邸第 1 案、⑳カッテン邸案、⑳H. アダムズ邸 (1912)、③ブース邸があり、D にフレンチウィンドウがあるものは⑩ヒルズ邸 (1900)、⑪ジョーンズ邸、⑤リトル第 2 邸、⑰メンデルソン邸案、③アレン邸がある。このうち③、⑪、⑲、⑳、③③、③④、③⑧、③⑨は複数のフレンチウィンドウが列状に並び、L と D の差異付けの契機となっている。差異は窓の外の庭や風景とのかかわり合いからも引き出される。⑨ハッサー邸、⑪ジョーンズ邸、⑯ウォーラー別荘第 1 案、⑮クーンリー邸、⑳シュローダー邸案、③ブース邸第 1 案、⑳カッテン邸案、⑤リトル第 2 邸、⑰メンデルソン邸案、③アレン邸があげられるが、⑲マコー

ミック邸案は、L と D からの風景にそれほどの違いを認め難い点において、特異である。

3-2) 媒介空間の変容

次に [L-EH-D] の構成における媒介空間に着目し、その変容を見よう。まずその呼称について、本稿でとりあげた 39 作品において、媒介空間が、図面に E あるいは EH と表記されるものは僅かに 3 件 (⑲、⑳、③⑥) である。殆どの表記、21 件は H である。その他 Re が 3 件 (⑲、③⑩、③⑪)、SH が 1 件 (③⑫)、Ga が 1 件 (③⑬)、原図情報なく不明 3 件 (①、③、⑤)、無記名 7 件 (③⑪、③⑬、③⑭、③⑮、③⑯、③⑰) である。H の性格は、単に玄関ではなく、E (あるいは V) と L 及び D との、さらには上階へ繋がる主階段との、動線の結節点である。

⑦ヘラー邸初期案には、実施されていないが、H のトリムの L 側への貫入を見ることができる (図 6 左)。L のトリムの方向が変えられた案 (図 6 右) もあり、ライトが H と L との関係性を自覚的にスタディしていたことが分かる。⑩ヒルズ邸は H の天井のみ低くなっている。天井トリムが L と H と D のみに付く例として⑦の他に⑫トマス邸、⑬フリック邸、⑭ダナ邸等があげられる。とりわけ、⑬フリック邸のトリムは垂壁にも廻り、主室 2 室とその媒介空間のありかたがこの住宅のテーマであることを示しているかのようである (図 7)。⑱W.フリーマン邸のアーチの間仕切り、⑳M.アダムズ邸や㉑フラー邸案の垂壁等、L と D との区別が重視される例もあるが、㉒ブラウン婦人邸第 1 案の、垂壁がありながら開け放つことのできる両開き引き込み戸、㉓クーンリー邸の L との間の飛長押や、⑳H.アダムズ邸の 3 室をまとめるトリム下の飛長押等は、単に分けることではなく、分けつつ繋げる両義的なありかたへの志向をそのままデザインしていると見ることができよう。㉔ギルピン邸案の Stu への天井貫入、㉕ボールドウィン邸第 1 案や㉖ボールドウィン邸における奥行き異なる低い天井高のアルコーヴ、㉗シュローダー邸案の L への飛長押等は、対 L、対 D への関係性の相違が重視されている。

⑱W.マーティン邸では、E の天井照明が H へ貫入し、L の暖炉脇のベンチ背後と、隣接する階段室の踊り場の側面とが H へ開かれ、空間の相互貫入が志向されていることが分かる (図 8)。⑳メイ邸では確固たる間仕切りはなくなり、天井トリムは 3 室をまとめるために複雑な壁面配置に沿っ

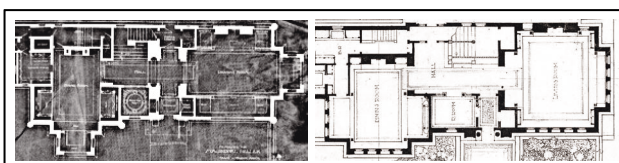


図 6) ヘラー邸初期案 (左: [CWol-74] / 右: [Mgl-86])



図 7) フリック邸

図 8) W. マーティン邸

図 9) メイ邸

て廻り(図9)、ついには図面から室名が消える。このように見てくると、㉔メイ邸以後の名付けられていない媒介空間、すなわち㉓ブース邸第1案、㉕リトル第2邸、㉗メンデルソン邸案、㉙アレン邸等の媒介空間が、可能性の空間として見えてくるのである。

結 「チャーナリー」型平面住宅の意味

冒頭で指摘したように、「チャーナリー」型は、「オークパークの自邸」型(以下「自邸」型)と並んで、ライトの住宅の初期からあった繋がり方の1つであり、本格的なプレイリー・ハウスの展開が始まる1900年以前には、型としてはこの2つしかない。最後に、「チャーナリー」型平面住宅の意味を、他の型との連関から考察したい。

同じ繋がり㉑としては、表1に示した4つの型がある。

(L-EH-D)が1つの大空間を志向する「バートン」型の成立はバートン邸の1903年であるが、それ以前の「チャーナリー」型の中にはそのような志向が伺えるものはない。すなわち、「バートン」型は、それに先行する「ヒコックス」型、すなわち繋がり㉑において(D-L-Lib)の一体的空間を志向するヒコックス邸(1900)から派生したと考えられる。逆に、「チャーナリー」型の㉔ブラウン夫人邸第1案等に、「バートン」型の影響が指摘されるであろう。一方で、㉘W.マーティン邸や㉔メイ邸、㉓ブース邸第1案、㉕リトル第2邸、㉗メンデルソン邸案、㉙アレン邸は、「ヒコックス」型とは異なる「チャーナリー」型の方法で、一体的な空間を志向する展開であり、ユーソニアン・ハウスの構成である繋がり㉑に続く、と言えよう。

「ハーディ」型は階段室を媒介空間としてDとLが垂直に重なって成立するものであり、ハーディ邸(1905)に実現するが、これも先立つ作品は「チャーナリー」型にはない。㉖ウォーラー別荘第1案の敷地はハーディ邸同様湖畔にあるが、Lは吹き抜けではなく、上階にはSitとBaが配されている。垂直方向に重なるのではなく敷地に横たわるようにずれながら階段で繋がる㉕リトル第2邸は、「チャーナリー」型と「ハーディ」型、両方からの派生として位置づけられるであろう。また㉓ブース邸第1案は、全く独自の展開として注目されるであろう。

「ロビー」型は主室が2階にあり、階段室を介して(L-D)が一体的な空間を志向するものであり、トメック邸(1904)で実現するが、㉑ハッサー邸が先行し、「チャーナリー」型として㉒シュローダー邸案に引き継がれてもいく。

「デイビッドソン」型は<L-EH-D>が連続した流動的空間を志向し、かつ吹き抜けLを有し、デイビッドソン邸(1908)年に実現する、プレイリー・ハウス後期に登場した型であるが、㉒トマス邸、㉑ミラード第1邸が先行する。

㉑ペイカー邸は、逆に「デイビッドソン」型から派生した「チャーナリー」型である。吹き抜けの居間を持つ㉓ブース邸第1案は、「デイビッドソン」型の影響下にもあろう。

最後に、㉖マコーミック邸案が、他の型の作品とあらゆる面で異なっていることに触れておこう。LとDの差異を放棄して、リビング・ゾーンとスリーピング・ゾーン(サーヴィス・ゾーンもあるが)の単純な区別に還元されているが、自然の壮大な風景と向き合っていることを考えると、後のユーソニアン・ハウスの成立と無縁ではないかもしれない。形式性は理念性でもあるかもしれない。ユーソニアン・ハウスとの連関への問いとして、今後の課題としたい。

謝辞

本研究は科学研究費補助金 26420658 の助成を受けたものである。記して謝意を表する。

出典

- [CWo1] Bruce Brooks Pheiffer, "Frank Lloyd Wright, 1885-1916, The Complete Works," TASCHEN, 2011.
 [Mg1] Yukio Futagawa Ed., "Frank Lloyd Wright Monograph 1887-1901," A.D.A.Edita, Tokyo, 1986.
 [Mg2] Yukio Futagawa Ed., "Frank Lloyd Wright Monograph 1902-1906," A.D.A.Edita, Tokyo, 1987.
 [Mg3] Yukio Futagawa Ed., "Frank Lloyd Wright Monograph 1907-1913," A.D.A.Edita, Tokyo, 1987.
 [Mg4] Yukio Futagawa Ed., "Frank Lloyd Wright Monograph 1914-1923," A.D.A.Edita, Tokyo, 1985.
 [Com] Storrer, W. A., "The Frank Lloyd Wright Companion," The University of Chicago Press, 1993, 岸田省吾監訳『フランク・ロイド・ライト全作品』丸善, 2000.

写真出典

- 図1: Yukio Futagawa Ed., "Frank Lloyd Wright Prairie Houses, GA Traveler 004," A.D.A.Edita, Tokyo, 2002, p.355/図2: [Mg2-23]/図3: Yukio Futagawa, Ibid., p.363/図4: [CWo1-312]/図5: Alan Weintraub, K. Smith, "Frank Lloyd Wright, American Master," Rizzoli, 2009, p.57/図7: Alan Weintraub, Ibid., p.53/図8: [Mg2-15]/図9: Yutaka Mizukami

注記

- 1) 先行論文として拙稿①「プレイリー・ハウスの生成システム フランク・ロイド・ライトの思索と制作」日本建築学会計画系論文集、第700号、pp.1449~1457、日本建築学会、2014.6 及び拙稿②「ヒコックス」型住宅の変容について F. L. ライトの住宅作品における多様性生成システムの研究」日本建築学会計画系論文集、第746号、pp.775~781、日本建築学会、2018.4 参照。
- 2) ダイアグラムAにおける要素(部屋)限定の抛り所を限定度の強い順に示せば、①壁・窓・ドア>②袖壁・垂壁

>③段差・天井高となる。①なら必ず区別。②③による要素区分の判断は、関連する他の住宅との差異と同一性なわら「型」の観点からそれ自体が変容の議論の対象となる。

3) ダイアグラム B の繋がり表記は、出入り可能であれば直線で繋ぎ、階段による上下の繋がりには点線で示す。

4) 本研究独自のダイアグラムには、他に、居間と住宅と土地とのゲシュタルトを示すダイアグラム C があるが、本稿の考察では使用しない。

5) 前掲拙稿①参照。

6) 本稿における室名の略記は以下の通り。Alc : alcove : アルコーヴ/B : bedroom : 寝室/Ba : balcony : バルコニー/Bal : ballroom : 舞踏室/Bic : bicycles : 駐輪場/Bil : billiard room : ビリヤード室/Bou : boudoir : 閨房/Bre : breakfast room : 朝食室/BrePo : breakfast porch : 朝食ポーチ/CB : child bed : 子供用寝室/Ch : chamber : 寝室/Clu : club room : クラブ/Co : corridor : 廊下/Coa : coal : 石炭庫/Con : conservatory : サンルーム/D : dining room : 食堂/Dem : demitasse : 小アルコーヴ/DPo : dining porch : 食事ポーチ/Dra : drawing room : 客間/Dre : dressing room : 衣装室/E : entrance : 入口/EH : entrance hall : 入口ホール/ESH : entrance stair hall : 入口階段ホール/f : fireplace : 暖炉/G : garden : 庭/GB : Guest bedroom : 客用寝室/H : hall : ホール/He : heater room : 加熱室/K : kitchen : 台所/L : living room : 居間/La : laundry : 洗濯室/Lib : library : 書斎/Lo : loggia : ロジヤ/LPo : living porch : 団欒ポーチ/MB : master bedroom 主寝室/Mor : morning room : 朝の居間/Mu : music room : 音楽室/Nu : nursery : 子供室/OCh : own chamber : 主寝室/Of : office : 事務所/P : parking : 駐車場/Pa : pantry : 配膳室/Pas : passage : 廊下/Pav : pavilion : 東屋/Per : pergola : パーゴラ/Pla : playroom : 遊戯室/Po : porch : ポーチ/RE : rear entry : 勝手口/Re : reception : 応接室/Sew : sewing room : 裁縫室/Sit : sitting room : 居間/SH : stair hall : 階段室/SPo : sleeping porch : 就寝ポーチ/Sto : storage : 倉庫/Stu : studio : スタジオ/Sv : servant : 使用人室/SvB : servant's bedroom : 使用人寝室/SvD : servant's dining room : 使用人食堂/SvE : servant's entrance : 使用人入口/SvH : servant's hall : 使用人ホール/Te : terrace : テラス/Tru : trunk : 収納/V : vestibule : 玄関/Ve : veranda : ベランダ/Vo : void : 吹抜

7) 設計者としてライトの名前が出せないため、マッカーサー邸は以前所属していたシルスビー事務所の同僚コーウィン (Cecill S. Corwin)、クラーク邸はサリヴァン事務所出身のターノック (E. Hill Turnock) の名前が記された。

8) L の暖炉はライトが、D の暖炉はサリヴァンがデザイ

ンした。[Com10] 参照。

9) 当初図面では Lib と表記され、現在暖炉のある場所は書棚となっている。1902年の改装ではDに食器棚が設計、増設されている。[Com12] 参照。

1 0) [Com14] 参照。

1 1) 当初図面にある Sit から2階へ上がる階段は、実現せず。[Com14] 参照。

1 2) 初期案では Dra と表記。また B は Ch と表記。

1 3) 第2案 (1903) は第1案と同じ部屋数、同じ基本構成で、湖岸から離れた場所に計画され、建設されず。

[Mg2-46] 参照。

1 4) 「自邸」型の初期案あり。[Mo2-154] 参照。

1 5) オリジナル図面には室名表記なし。ヴァスマート・ポートフォリオ (ドイツ語表記) では H と記されている。

1 6) 第2案 (1906) は2階平面図が残されていないが、1階平面の構成は第1案とほぼ同じ。第1案はスタッコ仕上げの木造であるが、第2案はコンクリートブロック造となっている点が異なる。なお、第1案の H は第2案では EH と表記。

1 7) ヴァスマート・ポートフォリオ (ドイツ語表記) では H と表記されるが、ウェンディンヘン・ライト特集号 (1925) では Ga と表記されている。

1 8) スリーピング・ゾーンとサーヴィス・ゾーンがあまり展開していない初期スケッチがある。[Mg3-42] 参照。

1 9) ジョージ・マン・ニーデッケン (George Mann Niedecken: 1878~1945) 画家、インテリア・アーキテクト。ダナ邸 (1902) をはじめとしてクーンリー邸 (1907)、メイ邸 (1908)、ロビー邸 (1909) 等でライトと協同。

2 0) 「ロビー」型の初期案あり。[Mo3-76] 参照。

2 1) ここにビリヤード台が描かれたスケッチもある。[Mg9-103] 参照。

2 2) 施主婦人の音楽会の会場にもなることが想定されていた。[CW01-422] 参照。

2 3) 「ヒコックス」型の初期案あり。[Mo3-197] 参照。

2 4) 2、3階のオリジナル図面はアーカイヴズにはない。

2 5) ユーソニアン・ハウス期にはソル・フリードマン邸 (1948)、ルエリン・ライト邸 (1953)、ライクス邸 (1959) 等がある。

2 6) 強い形式性へのこだわりは強い意志の現れとも解される。別稿で改めて論じたい。

2 7) デイビッドソン邸 (1908)、イザベル・ロバーツ邸 (1908)、ステフェンズ邸 (1909)、スチュワート邸 (1909)。

2 8) 計画案としては、プレイリー・タウンの家 (1901 : 「ヒコックス」型) やメッガー邸案 (1901 : 「ヒコックス」型)、スカダー別荘案 (1904 : 「ハーディ」型)、ショウ邸案 (1906 : 「ヒコックス」型) 等がある。

(平成30年10月2日受付)